

ネット ワーク 通信

2016
No.68
秋号

社会広聴アンケート…………… ①
「災害への備えと対応に関するアンケート」調査結果

インタビュー…………… ⑦
「日本の理解促進のためにやらなければならないこと」
ケント・ギルバート氏

企業と生活者懇談会…………… ⑨
安川電機（福岡）
中日本高速道路（静岡）

生活者の企業施設見学会…………… ⑰
東京ガス がすてなーに ガスの科学館

ご意見・ご感想…………… ⑱



「災害への備えと対応に関するアンケート」調査結果

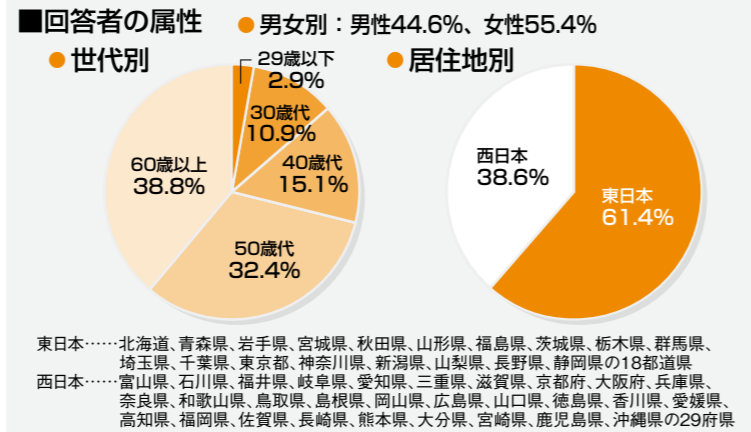
3人に2人が、自身の災害への備えは「不十分」と認識

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から5年が経過し、被災地では多くの方々の懸命な努力により、一歩ずつ復興への道のりを歩んでいます。また、2016年4月には熊本県熊本地方を震源とする熊本地震が発生し、甚大な被害をもたらしました。改めて大地震への備えの大切さを認識する機会となりました。

そこで、生活者における災害への備えや対応がどのように変化したか、企業の災害への備えと対応で期待することなどについて調査しました。

調査の概要

- (1) 調査名称：災害への備えと対応に関するアンケート
- (2) 調査対象：経済広報センターのeネット社会広聴会員 3037人
- (3) 調査方法：インターネットによる回答選択方式および自由記述方式
- (4) 調査期間：2016年5月19日～5月30日
- (5) 有効回答：1631人 (53.7%)

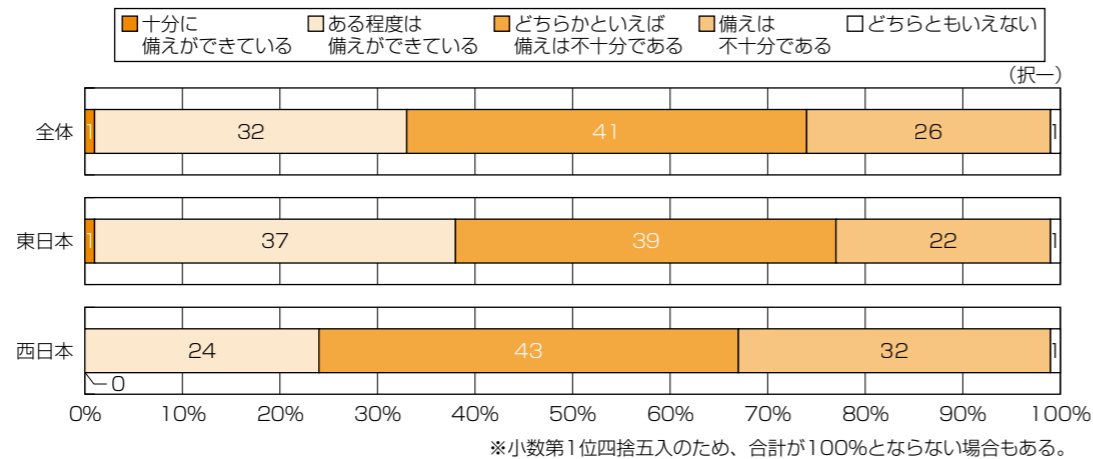


I 生活者の災害への備えと対応

I-1 災害対策の状況

Point 3人に2人が、自身の災害への備えは「不十分」と認識

全体・居住地別

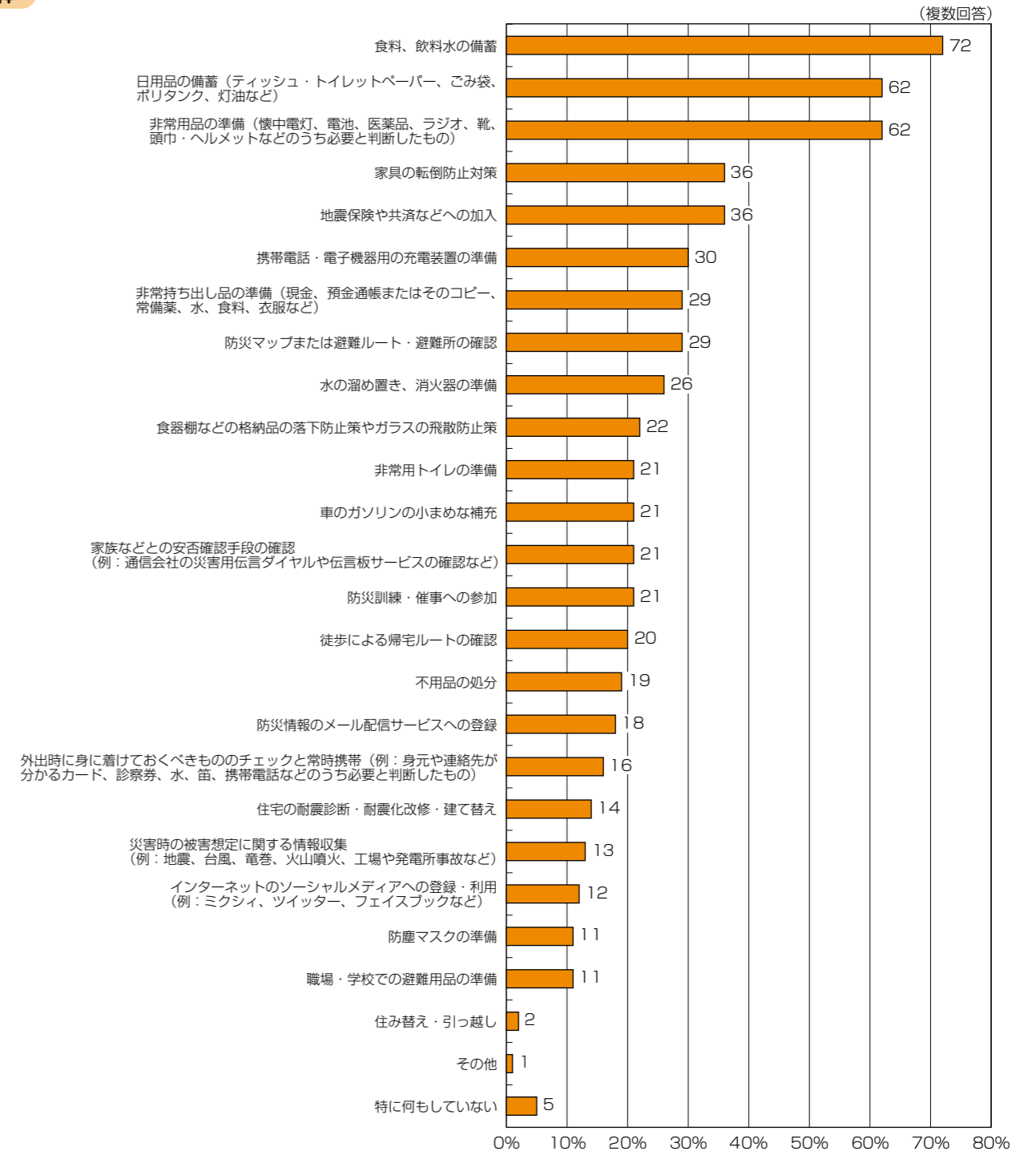


自分自身の災害への備えについて、「どちらかといえば備えは不十分である」が41%、「備えは不十分である」が26%と、合わせて67%が「不十分」と回答している。
居住地を東日本、西日本に分けて比較すると、「備えは不十分である（どちらかといえば／不十分である）」との回答は、西日本（75%）が東日本（61%）を14ポイント上回っている。

I-2 現在行っている災害対策

Point 3人に2人が、「食料、飲料水の備蓄」「日用品の備蓄」「非常用品の準備」をしている

全体



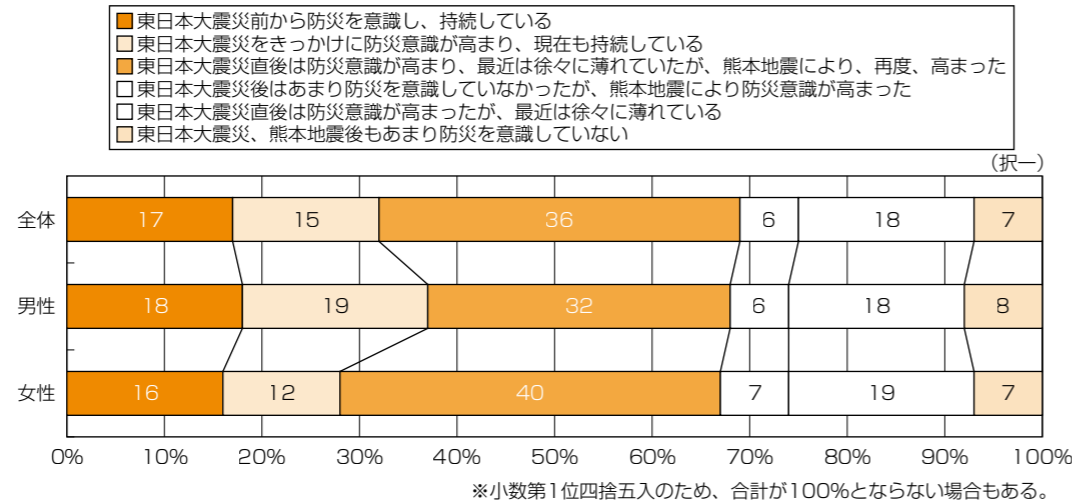
災害への備えとして、現在行っている対策は、「食料、飲料水の備蓄」（72%）、「日用品の備蓄（ティッシュ・トイレトペーパー、ごみ袋、ポリタンク、灯油など）」（62%）、「非常用品の準備（懐中電灯、電池、医薬品、ラジオ、靴、頭巾、ヘルメットなどのうち必要と判断したもの）」（62%）が上位に挙げられている。

I-3 防災意識

(1) 防災意識の変化

Point 3人に1人が「東日本大震災直後は防災意識が高まり、最近は徐々に薄れていたが、熊本地震により、再度、高まった」と回答

全体・男女別

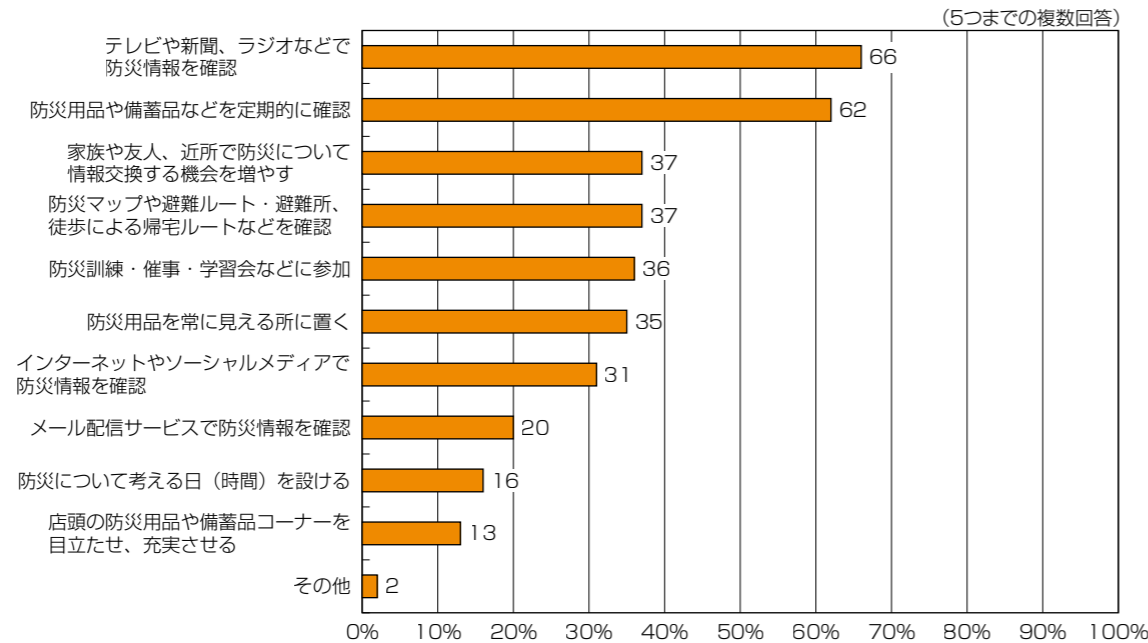


東日本大震災から5年が経ち、また、熊本地震の発生を受けて、防災意識はどのように変化したかを聞いたところ、「東日本大震災直後は防災意識が高まり、最近は徐々に薄れていたが、熊本地震により、再度、高まった」(36%)との回答が最も多い。「東日本大震災前から防災を意識し、持続している」(17%)、「東日本大震災をきっかけに防災意識が高まり、現在も持続している」(15%)、「東日本大震災後はあまり防災を意識していなかったが、熊本地震により防災意識が高まった」(6%)を合わせると、「現在、防災を意識している」のは、74%に上る。

(2) 防災意識の持続

Point 「テレビや新聞、ラジオなどで防災情報を確認」して防災意識を持続

全体



防災意識を持続するために、すべきことを聞いたところ、「テレビや新聞、ラジオなどで防災情報を確認」(66%)、「防災用品や備蓄品などを定期的に確認」(62%)が多く、続いて「家族や友人、近所で防災について情報交換する機会を増やす」「防災マップや避難ルート・避難所、徒歩による帰宅ルートなどを確認」(37%)となっている。

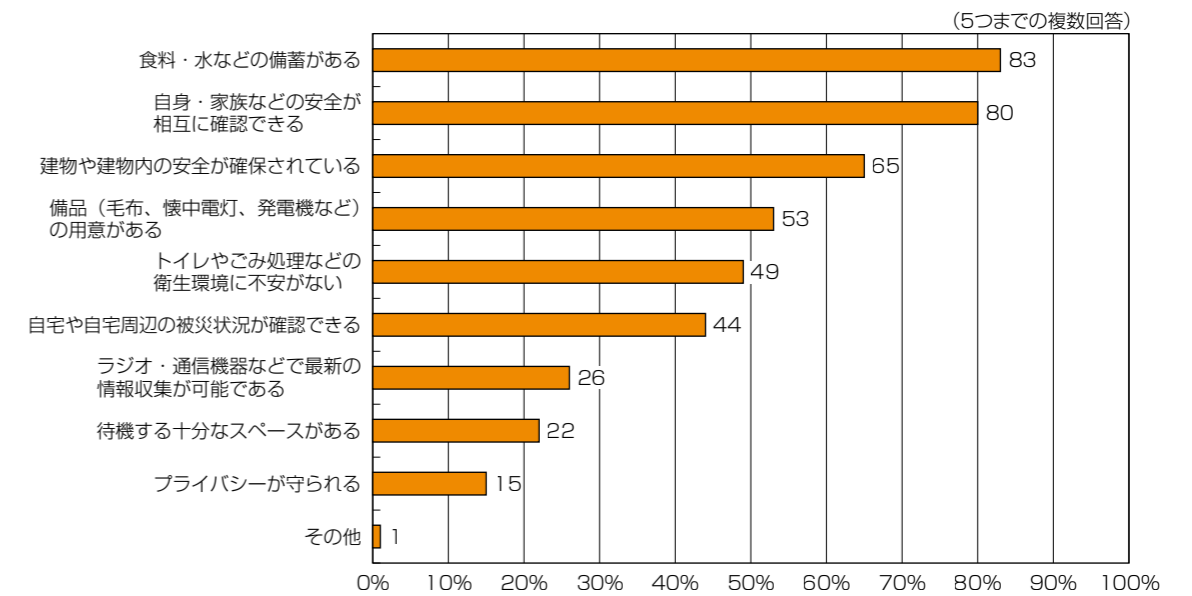
I-4 熊本地震被災地への支援状況

熊本地震に関連して、行った・行っている、また、行う予定の支援活動を聞いたところ、義援金の寄付に関する回答が多く寄せられた。被災地の製品の購入で支援をするという意見も多く見られた。また、被災地へ旅行することで支援していきたいとの声も多い。熊本城再建のための寄付や、観光で訪問したときには現地でボランティア活動も行いたいなど、被災地の観光業の立て直しを望んでいる意見も目立つ。さらに、被災自治体へのふるさと納税、チャリティーイベントへの参加・企画、所属する会社の支援活動を通じた被災地支援など、幅広い支援活動を実施、検討していることが分かった。

I-5 帰宅困難者への対応で重視すること

Point 帰宅困難時に職場や避難所にとどまる際には、8割が「食料・水などの備蓄がある」「自身・家族などの安全が相互に確認できる」を重視

全体



職場・学校などで被災した際に、どのような状況・備えがあれば、職場・避難所などにとどまれるかを聞いたところ、「食料・水などの備蓄がある」(83%)、「自身・家族などの安全が相互に確認できる」(80%)が上位で、飲食物の提供とともに、家族などの安否が確認できるかを重視している。

社会広聴アンケート 詳細をご覧になりたい方は!

経済広報センター 社会広聴アンケート

検索

<http://www.kkc.or.jp/>

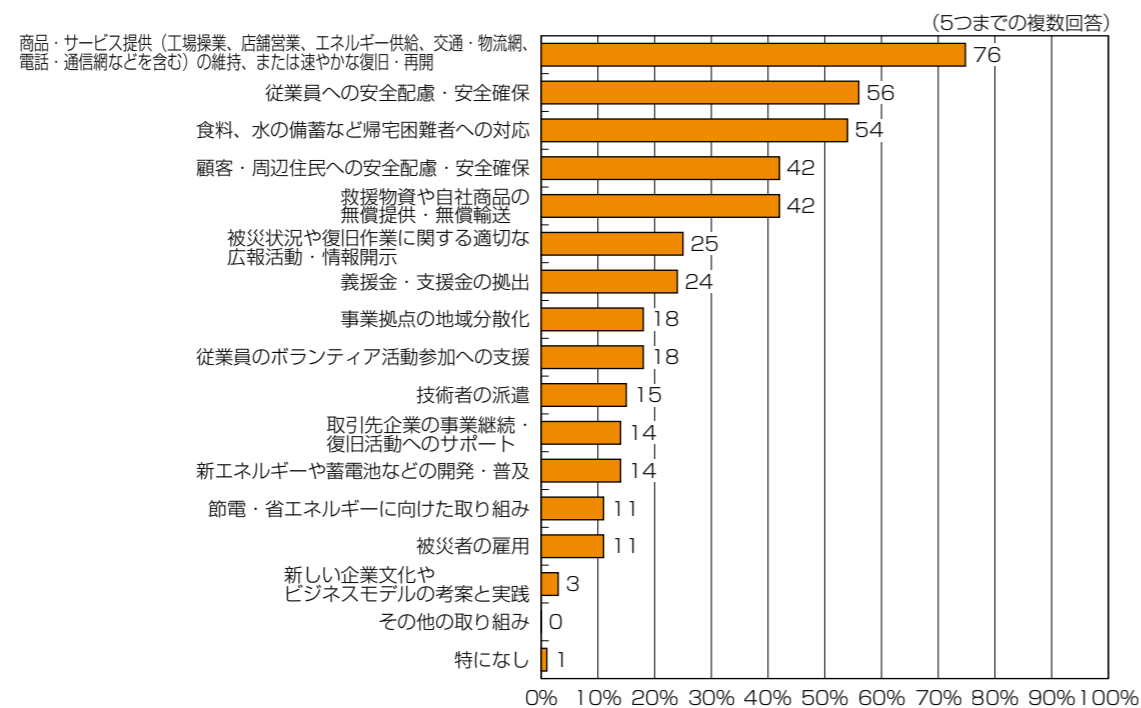


II 企業の災害への備えと対応

II-1 企業の災害対策に期待すること

● **Point** 4人に3人が「商品・サービス提供の維持、または速やかな復旧・再開」を期待

全体



企業の災害への備えや対応として期待するところ、「商品・サービス提供（工場操業、店舗営業、エネルギー供給、交通・物流網、電話・通信網などを含む）の維持、または速やかな復旧・再開」が76%と高い。続いて、「従業員への安全配慮・安全確保」（56%）、「食料、水の備蓄など帰宅困難者への対応」（54%）、「顧客・周辺住民への安全配慮・安全確保」（42%）、「救援物資や自社商品の無償提供・無償輸送」（42%）、「被災状況や復旧作業に関する適切な広報活動・情報開示」（25%）となっている。

II-2 熊本地震への対応で印象に残った企業活動

熊本地震への対応で、企業が行った様々な活動や取り組み（危機対応、事業継続・早期復旧活動、被災地支援など）で、印象に残ったことを聞いた。

交通・生活インフラの早期復旧に関する回答が多く寄せられた。また、小売業界による被災地への生活物資の素早い提供、それを運搬する運輸業界の取り組みについて賞賛する声が目立った。また、工場が被災したことによる生産活動の停止についての回答もあり、懸命な企業活動を評価する一方、今回の経験を踏まえ、リスクの分散など今後の防災への危機管理体制の構築に期待するといった声も多く見られた。

《主な回答》

◆インフラの早期復旧

- 鉄道・高速道路の速やかな復旧が初動対応に大きな役割を果たした
- 熊本空港へのフライトを早期に再開した
- 電気、ガス、通信などの生活に欠かせないインフラの復旧が早かった

◆生活物資の素早い提供

- 大手小売店が早期に弁当やおにぎりを被災地に届けていた
- コンビニエンスストアが早期に再開し、物資を提供した

◆金融機関の特別対応

- 営業時間の延長やスムーズな預金引き出しなど、金融機関が柔軟に対応していた
- 保険料の支払猶予といった対応が早かった

◆被災した工場の早期復旧

- 余震が続く中、工場の早期復旧を果たすべく尽力していた
- 正常な生産活動を再開するため、メーカーが必死に取り組んでいた

災害への備えと対応に関する意見・感想

I 生活者の備えと対応について

29歳以下の意見・感想

◆熊本地震で再度、自分で備えることの重要性を感じ、行動することができました。

30歳代の意見・感想

◆普段から家族と緊急時の対応について話し合っておくことが大事だと思います。いどこで災害に遭っても大丈夫のように、シミュレーションをしておきたいです。

◆熊本地震を実際に経験して、人ごとでは済まされないと実感しました。日頃から備えや安全確保などの準備が大切だと思いました。

40歳代の意見・感想

◆アンケートに回答して、自分が全く災害に備えていないことが分かりました。できることはやっていこうと思います。

◆大規模災害のたびに高まる人々の防災意識を、いかに長期にわたり維持し、具体的な対策につなげていくのが最も重要なことだと思います。

50歳代の意見・感想

◆災害規模が大きい場合は、国や自治体の支援が行き届かないこともあるため、普段から自ら災害に備えておく姿勢が大事だと思います。

◆防災用品の備蓄も大切ですが、地域の方々とのつながりを持って、不測の事態に協力し合える関係をつくっておくことが大切だと思います。

60歳以上の意見・感想

◆大きな災害が続き、災害が自分の身にも起こるかもしれないという危機感を持つようになりました。

◆災害が発生した際の対策として、最低でも3日間は生活できる水、食料、生活用品を備蓄しておきたいと思っています。

II 企業の備えと対応について

29歳以下の意見・感想

◆個人ではできない、ライフラインの復旧などの対応をお願いしたいです。

30歳代の意見・感想

◆企業による迅速な寄付や支援は、被災地にとって、とても有り難いと思います。今後も期待します。

◆企業の災害に対する備えを、生活者は知らないことが多いと思います。平時から、そのような情報をより提供してもらえると嬉しいです。

40歳代の意見・感想

◆まずは従業員の安全を第一に、次に、地域への貢献という視点を忘れずに行動してほしいと思います。

◆熊本地震では、東日本大震災の教訓が生かされていると感じました。

50歳代の意見・感想

◆企業活動は私たちの衣食住に直結しているので、災害が起きた際の速やかな復旧をお願いしたいです。

◆企業でも水や食料の備蓄を進め、災害時には社員だけでなく、帰宅困難者を含めた地域の人々への支援があるとよいと思います。

◆多くの企業が、しっかりとした災害対策を講じていますが、まだ、そこまで手が回っていない企業もあると思います。そのような企業に対して、災害対策についてサポートしていく必要もあると思います。

60歳以上の意見・感想

◆リスク分散を図り、被災時にはなるべく早い事業の再開に取り組んでほしいです。

◆地域住民との交流を持ち、その地域での災害時の連携・協働の仕組みの構築に積極的に関与し、災害復興の拠点として貢献してほしいです。

（文責 主任研究員 西田大哉）

日本の理解促進のために やらなければならないこと

経済広報センターは、社会広聴会員を対象に「地域活性化と観光立国に関する意識調査」を実施しました（調査結果は『ネットワーク通信』No.67に掲載）。そのアンケート結果に関連して、日本で長年生活するケント・ギルバート氏に「日本の理解促進」「国際交流の促進」「日本人の英語力」をテーマに話を聞きました。

Profile



タレント／カリフォルニア州弁護士
ケント・ギルバート 氏

1952年、米国アイダホ生まれ、ユタ育ち。米国ブリガムヤング大学で経営学修士号を取得。1971年、初来日。1980年、企業の法律コンサルタントとして再来日。テレビの人気クイズ番組「世界まるごとHOWマッチ」に出演し、一躍有名に。最近、米国大統領選を取り上げた番組に出演が続く。カリフォルニア州の弁護士資格を持つ。

なぜ、目黒に鷹番という地名があるのか

●経済広報センターには約4000人の社会広聴会員がいます。そのうちインターネットで回答が可能な3000人に「外国人観光客」をテーマにアンケート調査をしたところ、外国人観光客の増加には「経済活性化」「日本の理解促進」「国際交流の促進」を期待するとのことでした。

ギルバート 「日本の理解促進」のために、私にはひとつ提案があります。私は、目黒（東京都）に33年間、住んでいます。自分が生活している目黒の歴史を知りたいと思い、めぐろ歴史資料館に行きました。すると、日本語の説明しかありませんでした。英語がありません

んでした。たしかに、外国人観光客が、いきなり、このような資料館を訪問することはないでしょう。しかし、目黒区には多くの外国人が住んでいます。住んでいる外国人に、自分の住んでいる地域について知ってもらうことも「日本の理解促進」のためには重要ではないでしょうか。

私の知り合いに、ご主人が米国人、奥さまが日本人という夫婦がいます。その子どもは、カソリック系の私立中学に通い、ボーイスカウト活動をしていました。その学校には、日本語と英語が分かる子どもたちと親がいたので、資料館の説明を英訳しようということになりました。アプリによりQRコードを読み込むことで、英語で説明を読むことができます。これからは、これを音声化し、さらに英語以外の言語にすることもできます。これを全国の歴史資料館、博物館などに広めていけないかなと考えています。

お金はかかりません。この話をすると、自治体からは「予算がない」と言われそうですが、今の高校生は、スマホを使うことなどお手のもの。簡単にやってくれます。高校生が地元の歴史を学ぶのにも役立ちます。歴史教育、地域教育にもなります。

私も目黒の歴史について調べました。なぜ目黒駅が品川区にあるのか。本来は、もっと目黒川沿いに駅ができるはずだったこと。中世時代には目黒氏と碑文谷氏の武士団が支配していたこと、江戸時代には将軍の鷹狩りの地だったため、いまも鷹番という地名が残っているなど興味深いことばかりです。

このような博物館、資料館には、私のように地元に住んでいる外国人が、まず訪問します。そして、外国から友人が来た時には案内することもあるのではないのでしょうか。

私は、息子と目黒通り沿いに住んでいますが、マンションから富士山が見えます。息子が、目黒坂から富

士山が見える浮世絵を見つけてきたので家に飾っています。日本で生活している外国人向けの「日本理解促進」が不足しています。

外国人観光客のマナーに思うこと

●「経済活性化」についてはいかがでしょうか。

ギルバート 外国人観光客が来ることにより「経済の活性化」になるといいながら、特に中国人のマナーの悪さが強調されていますね。「爆買い」は決して悪いことではありません。

タバコを街中で吸ったり、並んでいる列に横入りするなど、マナーの悪さが指摘されていますが、それはあらかじめ注意しないツアーガイドが悪いのではないのでしょうか。

戦後、米国人が欧州を旅行し始めたころは、米国の若者がTシャツにジーンズで出掛け、大きな声で話し、うるさかったためアグリーアメリカン（ひどい米国人）と呼ばれました。その後、日本人がハワイで駐車違反はするし、マナーが悪いといわれました。そして今、中国人が批判されていますが、そのうち落ち着くと思います。

地名のローマ字表記は日本人のため？

●アンケート調査では、「交通表示、観光案内、レストランのメニュー」などのハード面は対応が進んでいるが、「外国語のできるスタッフ、ボランティア」といったソフト面が遅れているとの結果が出ています。「国際交流の促進」についてお考えは。

ギルバート 「交通表示」や「観光案内」は改善されてきていると思います。ただ、「国会議事堂前」なんていうのは「Kokkaigijidoumae」と書いてあっても、瞬時に読めません。せめて「Kokkai Gijidou Mae」のように区切ってほしいですね。あるいは英語で「National Diet」と書いてほしいです。もっとも日本ではかなりの地方に行っても、地名の下にローマ字表記がありますが、あれは外国人向けではないのではありませんか。日本人でも漢字の地名をどう読んだらいいのか分からないことがありますね。そんな時、ローマ字があると読み方が分かります。だから、あのローマ字は日本人のために書かれているのではないかと思います。

「ボランティア」が課題といいますが、日本では、オリンピック・パラリンピックのボランティアといっ

ても行政が仕切っています。英語検定何級以上とか、何点以上にこだわっています。そうではなく、案内ができる程度の英語力でも堂々とした態度の人の方がいいと思いますね。

母音が発音できれば英語はできる

●なぜ、日本人は英語が苦手なのでしょうか。

ギルバート 英語を通じさせる技術が不足しています。つまり、発音の問題です。日本では、まずローマ字を教えます。これがネックになっています。発音がローマ字読みになっています。もちろんローマ字を先に教えてもいいのですが、英語を学ぶ時には、ローマ字を忘れてもらう必要があります。英語をきちんと話せるようになるには、母音の発音を覚えることが必要です。外国人が学校で英語を教えるALT（外国語指導助手）制度にしても、地方自治体は推進しようとしたが、文科省は、教員免許を持たない者が教壇に立つことに反対でした。また、外国人慣れしていない地方に外国人の女性が行くことにも消極的でした。いじめられるのではないかと心配したのですが、実際には、行けば外国人は珍しいので憧れの的になりました。

この制度で、日本の子どもたちは英語は少しはうまくなりました。また、外国人コンプレックスも少なくなったと思います。「国際交流の促進」に役立ったと思います。

●日本人に欠けていることは。

ギルバート 米国では、中学2年生の時に、半年近くかけてスピーチの授業があります。リンカーンの有名な演説などを暗記してみんなの前で発表します。声の抑揚、姿勢、目線、ジェスチャー、感情移入などの表現力を向上させるものでした。このほか、『ニューズウィーク』の記事などを10分程度読んだ後、その内容を要約し、自分の意見を述べるという授業があります。この授業は、テレビ番組で簡潔にコメントするのに役に立っています。模擬議会、ディベートの授業もあります。ディベートは、自分の意思に関係なく賛成派・反対派に分かれて意見を戦わせるので、「自分の意思と異なる立場で議論することはいかなるものか」との意見もありますが、私はそうは思いません。賛成でも反対でもいいですが、反対の意見も知った上で判断することは重要です。また、反対側の意見を知ることによって意見が変わるかもしれません。

（聞き手 常務理事・国内広報部長 佐桑 徹）

企業と生活者懇談会

第203回【福岡 2016年4月5日】

株式会社安川電機 安川電機みらい館、ロボット工場

世界ナンバーワンのロボット最新技術を 体感しよう

4月5日、安川電機の安川電機みらい館、ロボット工場（福岡県北九州市）で、「企業と生活者懇談会」を開催し、生活者15名が参加しました。同社の企業概要、最先端の環境配慮技術を駆使したロボット村の概要説明を受けた後、ロボット村内のロボット工場、安川電機みらい館を見学し、その後、質疑懇談を行いました。

安川電機からは、林田歩広報・IR部長、岡林千夫安川電機みらい館館長、翠川宣之東京支社管理部長が出席しました。

● 安川電機からの説明

■ 安川電機の概要

安川電機は1915年（大正4年）、創業者の安川第五郎により合資会社安川電機製作所として誕生しました。当時は、電動機（モータ）が蒸気機関に代わる新たな動力として、あらゆる産業分野への進出を始めており、当初は、第五郎の父である敬一郎が経営する炭鉱会社の炭坑用電機品の受注製造からスタートしました。以来、「技術立社」を社是として、「電動機（モータ）とその応用」を事業領域に定め、その製品・技術により時代の先端産業を支えてきました。そして、昨年（2015年）、創業100周年を迎え、スピードや位置を正確に制御するACサーボモータ、モータの電源周波数を自在に変えることでモータの回転数を制御するインバータの分野では世界シェアナンバーワンを誇ります。モータを回し続けて100年。安川電機は創業の地、

北九州市黒崎からグローバルに、モータ制御のリーディングカンパニーとして産業、社会の発展に貢献しています。

■ メカトロニクスのYASKAWA

「メカニズム」と「エレクトロニクス」を融合し、より高い機能を発揮することをコンセプトに、同社は1969年（昭和44年）に「メカトロニクス」という概念を世界に先駆けて提唱しました。パソコンもない時代に、電機と機械の組み合わせで自動化が進むことを予見し、この造語がつけられました。今では、英語の辞書にも「メカトロニクス (mechatronics)」と掲載されています。

1977年（昭和52年）、それまで主流であった油圧式のロボットに代わって、現在の産業用ロボットにつながる国内初の全電気式産業用ロボット「MOTOMAN（モートマン）-L10」を完成させました。その後、メカトロニクス分野は急成長を遂げ、世界一、世界初の革新的な技術・製品の開発にこだわりながら、世界中のものづくりの品質と効率の向上に貢献しています。

同社が生産する産業用ロボットのうち、約65%は自動車産業で使われ、アーク溶接ロボットや塗装ロボットなど、自動車の生産に深く関わっています。その他にも、クリーンルーム内での液晶や半導体の製造において、なくてはならないハンドリング、搬送用ロボットなどあらゆる産業で同社のロボットが活躍しています。

■ ロボット村の概要

創業100周年を機に“100のエコ”をテーマに「本社棟」「安川電機みらい館」「ロボット工場」「YASKAWAの森」から成るロボット村をオープンしました。本社がある黒崎地区の活性化を進めるため、北九州市、JR九州と協定を結び、黒崎駅周辺の再整備の一環として計画されました。北九州市への恩返しとともに、地元の人に親しんでもらい、安川電機を誇りに思ってもらおうことを目指しています。ロボット村は低炭素社会の実現に向けて、従来の事務所と比べてCO₂排出

量の半減を達成しています。太陽光発電施設を設置し、発電した電力を蓄電池にためることで、ピーク時の電力使用量を減らす試みや、エアコンに取り込む空気を地中に通すことで自然に温度を調整させるなど、様々な取り組みを行っています。

また、安川電機みらい館では、世界一のサーボモータ、インバータ、産業用ロボットの最先端技術が作り出す、ものづくりの楽しさとすごさを体験できます。

● 見学の様子

■ ロボット工場

まず、ロボット村内にあるロボット第1工場を見学しました。第1工場は、1990年（平成2年）にロボットがロボットを組み立てる工場として世界で初めて建設されました。ここでは、持てる重さが最大24キログラムの小型の産業用ロボットが生産されています。産業用ロボットは基本的に受注生産で、第1工場では月に最大1100台のロボットを生産できます。ロボットが完成するまで10工程から成り、それぞれの工程ごとにブースが分かれ、ロボットが素早く、てきぱきとロボットのパーツを組み立てていきます。それぞれの工程で使う部品は別の工場につくられ、このロボット工場に搬入されます。そして、人の手作業によって、部品を各工程に供給していきます。部品は小さな青いパレットの上に載せて供給しますが、ロボットは自ら、作業しやすい位置にパレットを動かし、部品の形やサイズを見分けて作業の組み立てを行います。部品のサイズによってはロボットの手先を交換する必要がありますが、その交換作業もロボット自ら行うことができます。

1つの工程は20分ほどで、完成したロボットのパーツは、作業員によって回収され、組み立てラインへ運ばれます。このように、ロボットの組み立ては自動で行われるのではなく、要所で作業員による確認を経て進んでいきます。また、ロボットへの配線作業の工程だけは作業員の手によって行われているそうです。ロボットは硬いものをつかむのは得意ですが、ホースのようなやわらかいものをつかむのは少し苦手です。複雑で細かい配線作業は人の手がなければ難しいそうです。作業全体のうち、自動で行えるのは70%ぐらいで、人とロボットによる協働作業でロボットを生産してい

ます。目の前でロボットが自動で組み立てられていく様子を参加者は熱心に見守っていました。



小倉祇園太鼓を演奏するやすかわくん

その後、ロボット第2工場を見学しました。ここでは、ちりや埃を嫌うクリーン環境で動くクリーンロボットが生産されていました。半導体工場で使われる、半導体ウエハ搬送用ロボットや、液晶テレビ、太陽光パネルの生産工場で使われる液晶ガラス基盤搬送用ロボットなどの精密機器をつくるのに必要不可欠なロボット、ウイルスなどを扱うような非常に危険な場所で活躍するバイオメディカル用ロボットがつくられています。使用される環境に合わせて、生産環境も同様にクリーンな環境が必要で、作業員はクリーン服にマスクを着用し、入る前にエアシャワーを浴びます。工場内で使用するメモ用紙も通常のものだと埃が付着しているため持ち込まず、専用のものを使わなければならないそうです。

ここでつくられるロボットは全て人の手作業でつくられ、月に400台ほどが生産できるそうです。参加者は、ガラス越しに見学し、クリーンな環境でつくられているロボットを目にし、とても驚いていました。

■ 安川電機みらい館

最後に安川電機みらい館を見学しました。同施設は、地域住民や子どもたち、本社を訪れたお客さまなどに、ものづくりの魅力、安川電機の持つロボットの最新技術などを、体験・体感しながら分かりやすく伝える施設です。ロボットをメインとした展示物が多数あり、実際に動くロボットを見ながら、最先端技術を体験できます。「ロボティクス・サイネージ」では8台の産業用ロボットMOTOMAN（モートマン）に、動画を映し出す機器（サイネージ）が取

り付けられ、ロボットが協調しながら繰り出すダイナミックな動きと、それに連動する多彩な映像表現により、サイネージのスクリーンの中に引き込まれそうな感覚を覚えました。



「ロボティクス・サイネージ」を見学する参加者の皆さん

また、「メカトロニクス・ウォール」では、高さ4.5メートル、幅4メートルの壁面に、キューブが128個配置されています。モータにより高速で正確な前後移動と回転動作を行うキューブに、プロジェクターで直接投影し、動く物体とプロジェクションマッピング（実物と映像をシンクロさせる映像手法）の組み合わせにより、見たこともない瞬間を創り出します。どちらも、世界初の演出装置であり、安川電機みらい館でなければ見られない展示です。まるで、壁面が生き物のように滑らかに動き、飛び出してくる様子に、参加者は見入っていました。



それぞれのキューブの動きに合わせて映像が流れる

その他にも、ゲーム感覚でロボットに触れ、楽しく遊びながらロボット技術を学べる「ロボティクス・エクスペリエンス」を見学し、理解を深めました。

● 懇談会の概要

Q 現在のロボットはどれくらい人間に近づいていますか。また、どのような部分で人間を超えていますか。

A 人間の総合能力を超えるためにはまだ時間がかかります。しかし、人工知能（AI）の開発など、ロボットの技術開発は日夜進められています。極限の環境と呼ばれる、宇宙空間、深海、放射能がある環境といった人間では立ち入ることができない場所での作業動作では、すでに人間を超えた働きができます。ロボットの活躍分野は広がっていますが、安川電機では、ロボットを人に近づけていくというアプローチよりも、どのようにして人の生活を助けていくかが重要だと考えています。最先端のロボットというと、二足歩行型のロボットを思い浮かべる方が多いと思いますが、安川電機では形態にこだわるのではなく、不自由な方を助けることなど、人々の日々の暮らしに役立つロボットを生み出すため、研究開発を行っています。

Q 医療、介護、生活支援を行うロボットについて、取り組みを教えてください。

A 介護者の腰への負担をなくすため、介護ベッドから車いすへの抱え上げをサポートする製品を販売しています。介護する方の負担を軽減させるだけではなく、少子高齢化による労働力不足の解決策として期待されています。北九州市は国際戦略特区に指定され、介護用ロボットの実用化を推進しています。地域の方々と協力しながらさらに普及させていきたいと思っています。その他にも、脊髄損傷などにより下半身が完全に麻痺していても、装着することで歩行できるようになる歩行アシスト装置「ReWalk」を海外メーカーと提携して発売しました。産業分野で培ったメカトロニクス技術を医療・介護分野へ応用し、生活の質が向上する機器の開発を進めています。

Q 子どもたちへのメッセージや取り組みがあれば教えてください。

A 次世代を担う子どもたちへの働き掛けを積極的に行っています。昨今の子どもたちの理科離れを防ぐため、近隣の小学生以上を対象とした、見学会、体験学習を多く行っています。今後、技術革新を

進めるためには、多くの技術者が必要になります。小さなころから、ロボットをはじめとした科学に興味を持ってもらい、1人でも多くの子どもたちがサイエンスの分野に進んでもらえればと思っています。一企業としての取り組みではありますが、このような芽を育てていくことができるように、これからも多くの子どもたちに参加してもらえればと思っています。



懇談会の様子

Q ロボットの安全性に関する取り組みを教えてください。

A ロボットは国際安全規格（ISO）にのっとって開発設計されています。例えば、ロボットが停止する動作に関する配線はバックアップのために必ず2本用意しなければならないなどの規則があります。また、人と同じ場所で協働するロボットはモータの出力が80ワット以下でなければならないという日本標準の規制があり、その規制に沿ったロボットも開発しています。ここでジレンマがあり、人と共存するためのロボットはパワーを減らして、ゆっくり動かなければなりません。そうすると、ロボットの特徴である、早くスピーディーな動きができなくなり、仕事の効率がむしろ悪化してしまいます。以前、ある自動車メーカーと共同で、人とロボットが同じスペースで一緒に働くためのトライアルを実施しましたが、現状では共存は難しいという結論になりました。それよりも、ロボットが持つ特性を最大限に生かすため、ロボットの作業スペースを安全柵で囲い、ロボットができる作業は任せて、人にはもっとクリエイティブな仕事をしてもらえればと考えています。技術的には共存型ロボットの開発にも成功してい

ますので、現在は、そのロボットの使い方を含めた研究を進めています。

● 参加者からの感想

- ▶ 技術を発展させ、収益を追うだけでなく、優れた企業理念を持ち、地域社会への貢献もしっかりされている姿勢に敬服しました。
- ▶ 初めて見たロボットによるロボットの組み立てには時代の進歩が感じられ、目を見張るものがありました。懇談会で安川電機の皆さまが、愛社精神を持って、事業に取り組んでいる姿に誠意を感じました。
- ▶ ロボット工場や安川電機みらい館で素晴らしい設備と環境を体感し、科学発展の一端に触れることができ、有意義な懇談会となりました。子どもや孫たちにもぜひ見学をするように勧めたいと思います。
- ▶ 地元である北九州市黒崎の地に本社を置き、創業100年経った今でも、本社を動かさず、地域貢献を柱とした地元愛にとっても感銘しました。
- ▶ ロボットをつくる工程などをとても丁寧に説明していただき、よく理解できました。安川電機の方々のロボット技術に対する熱い思いが伝わってきました。



● 安川電機 ご担当者より ●

B to B企業の当社が生活者の皆さまとの交流の機会をいただきましたこと心より感謝申し上げます。皆さまから頂戴しましたご感想やお褒めの数々、関係者一同感激の思いで拝読させていただきました。改めてロボットへの関心の高さと当社への期待の大きさを実感しております。「産業を興して国の恩に報ゆる」の志に基づき北九州黒崎で創業し100年。これまでご支援いただいた多くの皆さまに感謝し、これからの100年に向けグローバルにかつ新たな社会を創造すべくチャレンジし続けてまいります。社業発展と地域・社会貢献を両立させグローバル企業にふさわしい企業へとさらに成長してまいりますので、今後とも皆さま方のご支援のほどよろしく願います。

（文責 主任研究員 西田大哉）

中日本高速道路株式会社 東名高速道路用宗高架橋 リニューアルプロジェクト工事現場 NEOPASA清水 コミュニケーション・プラザ富士

本格化する“高速道路リニューアルプロジェクト”を見に行こう！

5月26日、中日本高速道路（NEXCO中日本）の東名高速道路用宗高架橋リニューアル工事現場（静岡市駿河区）、NEOPASA清水（静岡市清水区）、コミュニケーション・プラザ富士（静岡県富士市）で、「企業と生活者懇談会」を開催し、生活者13名が参加しました。同社の概要、高速道路のリニューアルプロジェクトの必要性について説明を受けた後、東名高速道路用宗高架橋リニューアル工事現場の様子などを見学し、その後、質疑懇談を行いました。

NEXCO中日本からは、東京支社富士保全・サービスセンターの小原寛所長、前田武頼施設担当課長、東京支社静岡保全・サービスセンターの石橋善明所長、竹沢正文更新工事担当課長、経営企画本部広報部の横山亮介副部長、経営企画本部広報部広報室の木之瀬逸郎室長代理、会田俊介氏が出席しました。

● NEXCO中日本からの説明

■ NEXCO中日本の概要

NEXCO中日本は2005年（平成17年）10月1日に旧日本道路公団の分割民営化により設立した会社で、従業員数は約2100人、NEXCO中日本グループ全体では、約1万人となっています。管理・運営している道路は、東名高速道路、中央自動車道、新東名高速道路の全線、名神高速道路、北陸自動車道の一部などで、営業延長は、2058キロメートル（2015年度末時点）になります。

同社は「高速道路の建設」「高速道路の保全・サービス」「関連事業」の主に3つの事業に取り組んでいます。「高速道路の建設」は、新東名・新名神の整備

によるダブルネットワークの形成や大都市圏の環状道路の整備など、高速道路ネットワークの整備を着実に効率的に進め、地域の期待に応えています。「高速道路の保全・サービス」は、構造物の老朽化や近年の厳しい気象環境などの課題に機敏に対応し、信頼性の高い高速道路ネットワークの管理・運営とお客さまに満足していただけるサービスを24時間365日提供しています。「関連事業」は、特徴と魅力あるサービスエリアづくりをはじめ、道路技術を生かした外販、不動産開発など、新たな事業の展開に取り組んでいます。

■ 高速道路リニューアルプロジェクトの必要性

高速道路は、日本の高度経済成長と時期を同じくして、飛躍的に発達しました。そのため日本全体で高速道路の老朽化が進んでいます。NEXCO中日本が管理する高速道路も開通から30年以上経過した道路が約6割を占めています。また、近年多く見られる大型車両の増加とともに総重量などを超過した法令違反車両の通行、積雪寒冷地の開通路線延長の増加や凍結防止剤の使用量の増加などが、老朽化をさらに加速させています。

高速道路ネットワーク機能を長期にわたって健全に保ち続けていくために、また、これからも暮らしや経済を支える大動脈としての役割を果たしていくために、早期に大規模更新・修繕事業に取り組んでいく必要があります。具体的には、橋梁の場合、床版（車が走行している部分）の取り替えや水、塩化物の床版への浸透を遮断する高性能床版防水の施工、桁（車の走行面を支える部分）の補強などを行います。

● 見学の様子

■ 用宗高架橋でのリニューアル工事の見学

用宗高架橋は、東名高速道路の静岡IC～焼津IC間にあり、老朽化した鉄筋コンクリート床版を新しい床版に取り替える工事を行います。用宗高架橋は、開通から47年が経過しているそうです。

参加者は、大型の重機を使用して老朽化した床版を吊り上げて撤去する様子などを見学しました。長さが約12メートル、重さは10トンを超える新しい床版を見て、その迫力に驚きの表情を浮かべるとともに、「工事による渋滞などの社会的な影響を少なくするため、

上下線をうまく活用して、2車線の交通を確保したり、できる限り工事期間を短縮するために、現場ではなく工場ですべての床版を造ってからトラックで運んでいます」といった説明を聞き、参加者からは「素晴らしい工夫だ」と感心の声が上がっていました。



説明を聞きながら迫力あるリニューアル工事を見学

また、古い床版の撤去など大きな音がする作業は昼間に、新しい床版の設置などの比較的音がでない作業を夜間に実施するといった近隣住民への配慮・工夫などの話も聞きながら、熱心に見学しました。



撤去した古い床版の一部を間近に見てその大きさを改めて確認

■ NEOPASA清水のトイレの工夫などを見学

次に参加者は、新東名高速道路のパーキングエリアである「NEOPASA清水」を見学しました。NEOPASAとは、新東名高速道路の商業施設ブランドの名称で、全8カ所に展開しています。新しさを表現する「NEO」、パーキングエリアの「PA」、サービスエリアの「SA」を組み合わせたネーミングになっています。

NEOPASA清水は、「くるまライフのコミュニティパーク」をコンセプトにしており、施設はガレージをイメージして建てられ、タイヤやチェッカーフラッグをモチーフとした調度を備えるとともに、車や

バイクの展示も行っています。また、飲食店や土産物店の他にアパレルや生活雑貨店などの出店の充実、新東名高速道路で唯一の富士山が眺望できる展望台の設置などといった特徴があります。



ガレージをモチーフとした施設のNEOPASA清水

参加者は、NEOPASA清水の自由見学の前に、NEOPASA清水の大きな特徴の1つである「日本トイレ大賞～国土交通大臣賞～」を受賞した「おもてなしトイレプロジェクト」について説明を聞きました。

このNEOPASA清水の駐車場は扇形になっており、どこの駐車スペースに車を停めても、トイレまでの導線がスムーズになるように設計されています。また、くつろぎの空間として、広いロビースペースを設けています。さらに男子トイレ、女子トイレともに「通常期用」「繁忙期用」と分かれており、繁忙期の対応が可能になるだけでなく、清掃作業や補修作業を効率的に行うことができます。他にも、入り口から一目でこのトイレが空いているか判別できるようにランプが設置されていたり、お客さまのニーズに合わせてシャワートイレを設置していたりと数多くの工夫が施されています。「清掃は、硬く絞ったモップを使用した乾式清掃を採用。また、床を簡単に清掃できるよう、便座を床でなく、壁に設置するなど清掃員の提案を採り入れ、滑らず、臭わない、清潔感のあるトイレを実現しました。」といった説明を聞き、参加者からは「なんといいってもきれい。4年経っているとは思えない。清掃員の方の目線がしっかり反映されているから新品同様清潔に保たれている」といった声が多く上がっていました。

最後に、NEOPASA清水が大災害時などに防災拠点（避難場所など）となれるよう、緊急放送用のスピーカー、非常電話、防災備蓄倉庫、ヘリポートなどが完

備されていることについて説明を受けました。



実際のトイレ内で説明を聞く参加者

コミュニケーション・プラザ富士の見学

最後にコミュニケーション・プラザ富士を見学しました。まず、併設されている富士保全・サービスセンターの車庫に並んでいる様々な管理車両について説明を聞きました。参加者は、冬などに道路が凍らないように薬剤を混ぜた水をまく散水車や交通規制をする際に走行中の車にその存在を知らせるための標識車など、普段あまり近くで見ることがない車両についての説明を聞き、興味深げに様々な質問をしていました。



コミュニケーション・プラザ富士でジオラマを見ながら説明を受ける

その後、コミュニケーション・プラザ富士の中に入り、新東名高速道路を造る上での苦労や最先端の建設技術などを、映像と実際に工事で使用された機械の模型などで体感しました。また、大きく5つの過程(調査・土工・橋・トンネル・舗装)に分けて再現された本物さながらのジオラマを見ながら分かりやすく高速道路の建設手順などについて学びました。新東名高速道路の工事着工が1995年(平成7年)、2020年に全ての工事が終わり開通する予定といった話や新東名高速道路建設で発生した土は、全て建設と沿道の整備事業に

有効活用できるように設計しているといった話など、参加者は終始感心しながら熱心に耳を傾けていました。

懇談会の概要

Q 高速道路における技術・サービス面でNEXCO中日本独自の取り組みはありますか。

A 旧日本道路公団時代は、試験研究所で技術的な研究を行っていました。現状もNEXCO中日本、東日本、西日本と共同で、研究機関を設立し、研究を行っています。当社独自の取り組みとしては、名古屋大学と協力して、橋の点検に関する実地的な研修ができる施設「N²U-BRIDGE」を運営しています。その他、岐阜県で、電気設備などについて実際の器具を使った研修が可能な施設「E-MAC技術研修センター」を運営しています。また、点検手法において、高速で走行しながら近接目視レベルの撮影を行い、画像処理技術を活用し、異常を自動検知するシステムを研究・開発しています。サービス面では、24時間体制のお客さまセンターを本社に設置し、お客さまからのメール、電話などでのご意見・ご質問に対応するように取り組んでいます。また、サービスエリアスタッフへの接客に関する講習会などを実施し、技能を高めるように取り組んでいます。

Q 高速道路の通行料金の徴収期間は設定されていますか。また災害時などの復旧費用についてはどのように捻出していますか。

A NEXCO中日本に限らず、全国路線網を形成している高速道路料金の徴収期間は、リニューアル工事の費用なども含めて、2060年までとなっています。災害時などの費用についても基本的には、頂いている通行料金から捻出することになります。なお、大規模災害時には、国から補助金が交付される場合があります。

Q メンテナンスや補修の体制はどのようになっていますか。

A 定期的なメンテナンスとしては、路面清掃車による清掃や、目視での落下物の回収などを実施して

います。緊急の事故対応などについては、道路管制センターが24時間体制で監視しており、何かあれば、保全・サービスセンターに駐在している交通管理隊などに指示を出して、現場に急行させるなど、道路の交通機能を守っています。

Q 防災に関する取り組みはありますか。

A 新東名高速道路は、東名高速道路より山側を走行するため、地震・津波などの影響を受けにくく、東名高速道路の代替機能を持つことができると考えています。また、災害時にSA・PAを防災拠点として活用するといった協定を県などと結んでおり、自衛隊や消防などへの応援活動や周辺地域にお住まいの方の避難所として機能できるように準備しています。



懇談会の様子

Q SAやPAに出店する商品の選定基準について教えてください。

A NEXCO中日本では、まずSA・PAにどのような業種・業態を出店するかを決定し、決定後、その業種・業態に見合った店舗などに出店を打診します。店頭と並べる商品などについては、できるだけ「地域らしさ」をお客さまに感じていただけるように地元の食材などを活用してほしいというお願いはさせていただくこともありますが、基本的には店舗にお任せしています。

参加者からの感想

- ▶リニューアル工事で最新の工法、技術を活用することにより、さらに高速道路が安全な方向に進んでいることを体感でき、うれしく思います。
- ▶高速道路建設ばかりに目がいきがちですが、SA・PAのトイレの清掃など、日常のメンテナンスの重要性を分かりやすく説明いただき、非常に興味深いものになりました。今後もさらなる快適性に期待しています。
- ▶NEXCO中日本の主要事業のプロセスを見て、触って、体感して、さらにそれぞれの現場で働く方々からの率直なお話をいただき、とても面白く、参考になりました。
- ▶用宗高架橋リニューアル工事では、路肩も活用して走行車線を確保したり、床版を工場で作ってから運んで設置するなど、技術力の高さや細やかな心配りを感じました。ぜひもっと多くの人に工夫を知ってもらえるように取り組んでほしいと思います。
- ▶コミュニケーション・プラザ富士では、模型などを見ながら、説明を聞くことができ、工事についてだけでなく、高速道路そのものについて理解することができました。



● NEXCO 中日本 ご担当者より ●

このたびは、高速道路リニューアルプロジェクトをはじめ、当社施設の見学にお越しいただき、ありがとうございます。

リニューアルプロジェクトにつきましては、今回で見学いただいた用宗高架橋をはじめとし、今年度(2016年度)よりいよいよ本格化します。今後2029年度までに約1兆円規模の事業を実施していきます。

当社はこれからも、お客さまの安全を最優先に、安心・快適な高速道路を提供できるよう、皆さまの声をお聞きしながら事業を進めてまいりますので、引き続きご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

(文責 主任研究員 平澤 徹)

がすてなーに ガスの科学館 東京ガス株式会社



2016年7月8日、がすてなーに ガスの科学館（東京都江東区）で、「生活者の企業施設見学会」を開催し、社会広聴会員20名が参加しました。

■概要説明

東京ガスは1885年（明治18年）に設立され、1969年（昭和44年）には日本で初めてLNG（液化天然ガス）を導入するなど、130年にわたり首都圏を中心とした地域へ都市ガスを供給してきました。現在は、スマートエネルギーネットワークの構築など、エネルギーの安全かつ安定的な供給に向けた総合エネルギー事業を展開しています。

がすてなーに ガスの科学館は、次世代層（主に小学生）がエネルギーと環境を楽しく学ぶことができ、さらに、ステーキホルダーへ東京ガスの事業内容や新たな取り組みなどを伝える施設として2006年（平成18年）6月に開館しました。見て、聞いて、触って、嗅いでと五感を駆使して楽しみながら理解する展示ゾーンと個性豊かなコミュニケーションによるサポートで、科学と暮らしの視点から、エネルギーと環境の「?（はてな）」を学び「!（なるほど）」を実感するアクティブ・ラーニングの場を創出しています。

■見学の様子

「炎のふしぎギャラリー」では、1872年（明治5年）に横浜でともったガス灯が参加者を出迎えてくれます。これは都市ガス事業の始まりといわれるもの



都市ガスや炎の特性を体験

で、マントルと呼ばれる発光剤の染み込んだ網袋を使って炎を明るくする工夫や、当時は1本ずつガス灯に点火していたことを聞き、暮らしを豊かにしてきた都市ガスの原点を感じることから見学がスタートしました。ガスや炎の特性を知る体験コーナーでは、炎色反応を利用した明治時代のイルミネーション「*プカ・イルミネーション」やガス入りのシャボン玉に炎を命中させて火をつける「炎のシャボン玉」など、炎を操ることに悪戦苦闘しました。最近では、オール電化の家庭が増え、「当館で炎を初めて見る子どもも多く、炎を怖いと思っている」というエピソードを聞いた参加者は驚いていました。

「プカのひみつ」では、実物のガス管や気化器などに触れながら都市ガスの製造供給過程をたどりま。海外から輸送される天然ガスは、マイナス162度で冷却して体積を600分の1に減らした液体の状態を運搬し、LNGタンクに貯蔵されます。その後、海水のシャワーで温めて気化させ、臭いを付け、都市ガスとして家庭に届けられます。深さ60メートルのLNGタンクの内壁は、マイナス162

度の液体が触れた際の収縮に耐えられる凹凸のあるステンレス製、黄色のガス管は、地中で目立ち、地震などで大きな力がかかっても3倍に伸びて壊れないポリエチレン製と、安全・安心に配慮した設計がされ、参加者から感心の声が上がりました。



都市ガスの製造供給過程をたどる

「ピカッとフューチャー」では、シェールガスを含めても有限な天然ガスの有効活用について体感します。ガスコージェネレーションシステムが導入された館内では、100キロワットの燃料電池が、ガスから抽出した水素と空気中の酸素の化学反応で電気をつくり、廃熱を冷暖房や給湯に利用しています。また、建物間でエネルギーを融通するスマートエネルギーネットワークの仕組みをゲームで理解し、参加者は限りある資源を次世代に残す方法について考えを巡らせていました。

また、LNGの性質を学ぶサイエンスショーでは、気体が液体になる様子や凍結したゴムボールが弾性を失い砕ける様子などを観察し、エネルギー・環境と私たちの暮らしとの関わりを学びました。



LNGの性質を学ぶサイエンスショー

※プカ：がすてなーにのキャラクター。「天然ガス」「LNG」「都市ガス」「ガスの炎」などの象徴。

■参加者からの感想

「資源の少ない日本において天然ガスの有用性を改めて感じました」「ガスを通してエネルギー・環境を考えるきっかけとなり、暮らしの中でエコを実践していこうと思いました」「興味を引く展示が多く、コミュニケーションの的確な説明で理解が深まりました」「ガスを冷却して液体にし、再び気体にするガスの製造過程を再現したサイエンスショーはインパクトがありました」

（文責 主任研究員 守谷あき）

2016年
No.67 夏号を読んで

「社会広聴会員」からの ご意見・ご感想

「地域活性化と観光立国に関するアンケート」について

- 皆さんが感じていることがアンケート結果に垣間見え、面白く思いました。私の住む京都にもたくさん外国人旅行者がお越しになります。言語の問題の他、空港からのアクセス時間の短縮は喫緊の課題ではないかと思えます。
（30代・男性・京都府）
- 地元でラグビーワールドカップが開催されますが、日本開催は知っていても開催される地域についての認識は低く、少々残念に思いました。外国人、日本人に限らず、多くの方に来ていただきたいです。
（50代・女性・埼玉県）

「企業と生活者懇談会」について

〈雪印メグミルク〉

- 自社を語るのに、まず不祥事の件から説明しなければならぬつらさが伝わってきました。いったん傷ついた「スノーブランド」への信頼を取り戻すためには何十倍もの企業努力が必要、頑張ってもらいたいと思いました。
（50代・女性・千葉県）
- 子どもの頃からお世話になっていて、親近感があります。衛生管理については「さすが」の一言です。これからも安心して食べられるよう努めていただければうれしいです。
（30代・男性・大阪府）
- 雪印メグミルクが設立された経緯がよく分かりました。異物を工場に持ち込まないための「取るミング」やエアシャワーを体験できるのはすごいと思いました。
（60代・女性・兵庫県）
- 6Pチーズや芳醇ゴーダの愛用者として、何よりも安心して食べ続けられるための品質管理を願っていますので、その取り組みの一端を知ることができました。
（70代・男性・大阪府）

〈阪急電鉄〉

- 車両が50年使用されているということですが、寿命が長いものだと感じました。この間、25年をめどにリニューアル工事、5日に1回の洗車とといったいろいろなメンテナンスをしている結果だと思いました。
（70代・男性・兵庫県）
- 「シニアライフ総合サポート事業」など、高齢者

- に対する取り組みも実施されていることを知り、うれしくなりました。
（70代・男性・兵庫県）
- 阪急電鉄が人材育成において注力している「ミスは誰でも起こし得る」「昨日までの安全は今日の安全とは限らない」は、重い言葉だと思いました。これはどの企業にも共通の理念ではないかと思えます。
（60代・女性・神奈川県）
- 電車の座席に天然のアンゴラヤギの毛を使っていることに驚きました。実際に座ってみたいくなりました。
（40代・女性・北海道）

生活者の企業施設見学会について

〈オリンパス技術歴史館〉

- 施設名の愛称が最初のカメラ用レンズからというのが興味深かったです。こういうことが企業のDNAとして受け継がれるのだと思いました。
（50代・女性・東京都）
- オリンパスの内視鏡技術は、医療に携わる人々にとっても、また、何より患者さんにとってありがたいものだと感じました。
（50代・女性・富山県）
- オリンパスの技術歴史館は面白そうですね。内視鏡外科手術の体験など、ぜひやってみたいと思いました。
（70代・男性・愛知県）

講演会「どうなる？日本の将来～税・財政・社会保障のあり方～」について

- いつもなぜ法人税を下げようとするのかに疑問を抱いていましたが、日本の企業が外国に拠点を移して日本に利益を還元できないからだと分かりました。
（30代・女性・神奈川県）
- 支える側と支えられる側の人口の逆転が起こるといわれている2040年問題。社会保障費という点だけでなく、人手不足も考えながら対策を進めてほしいと思います。
（40代・男性・東京都）
- 2020年の東京五輪に向けて、規制緩和とイノベーションが実現すれば、民間需要が伸び、日本経済はさらに良くなるとの見方に期待したいです。
（70代・女性・愛知県）

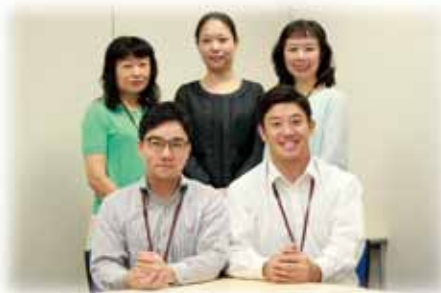
ご意見・ご感想

- 社会広聴会員で、企業の広報部に所属しています。広報するためには「きく（聞く、聴く、訊く）」ことが最も大切なことであり出発点だと思います。経済広報センターの広聴活動を拝見する中で、その姿勢、構成、そして目的を学んでいます。
（50代・男性・大阪府）

東京メトロ有楽町線・ゆりかもめ「豊洲駅」より徒歩6分
●住所：東京都江東区豊洲6-1-1 ●TEL：03-3534-1111 ●入場料：無料
●開館時間：9時30分～17時（入館は16時30分まで）
●休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、施設点検日

表紙のことは

東日本大震災以降、防災に関するニュースが多く報道されるようになったと感じています。自治体や企業による防災への取り組み、最新防災グッズの紹介、大規模な防災訓練の実施など、多くの方が“防災”というキーワードに触れる機会も多くなりました。また、実際に、自宅に防災グッズを常備している家庭も多いことでしょう。しかし、震災の記憶は時間とともにどうしても薄れていってしまいます。周辺の方々と情報交換することや、防災の日には家族で災害への備えを確認するなど、定期的に非常時の備えを確認できるように、一人では難しいことでも周囲と協力して、防災意識を高め合っていきたいものです。



守谷 ちあき(後列中央)

「企業と生活者懇談会」「生活者の企業施設見学会」では、生活者の皆さまからは企業の事業活動を深く理解しようとする姿勢、企業の皆さまからは企業の考え方や活動を正しく伝えようとする姿勢を感じます。良好なコミュニケーションには、「傾聴」が大切だと感じる今日この頃です。

平澤 徹(前列右)

「秋」といえば、勉強の秋、食欲の秋、スポーツの秋、行楽の秋、芸術の秋、といろんな秋がありますが、皆さんにとって、今年の秋はどんな秋でしょうか。私はやはり今年も食欲の「秋」とスポーツの「秋」がメインになる予感がしています。夏の暑さが和らぎ少しずつ夏バテからも解消されていく「秋」を全力で楽しみたいと思います。(もちろん仕事も頑張ります)

西田 大哉(前列左)

京都のある寺に紅葉を見に行きました。木々の配置が計算されて、全体が1つの風景画のようで感激しました。一方、大雪山の紅葉は、それとは逆です。ロープウェイから見下ろす景色は、黄色と赤の絨毯が敷き詰められているようで、ある意味豪快です。日本一早い紅葉と知られていて、見られるのは9月中。久しぶりに見に行きたいですね。

高橋 美香(後列左)

東日本大震災の年に小学生だった知人の娘さんが、高校で進路を決める段になり「DMAT(災害派遣医療チーム)」を目指したいと言い出したそうです。災害の際に少しでも多くの命を救う仕事をしたいく……と。震災のとき、まだ子どもだった彼女の心も悲しみや痛みを感じ、そこから小さな胸に灯をともし続けたのでしょうか。「志」に向かって頑張れ!

佐藤 亜矢子(後列右)

地域で年に2回、防災訓練を実施しています。救護班で、けが人役を担架に載せ、非常階段を下りる訓練を受けたことがありますが、想像以上に大変でした。本番が来ないことが一番ですが、万一来るに備えて、身の安全を第一に行動できるよう、常日頃から地域ぐるみで取り組んでいくことは、とても重要だと実感しました。

社会広聴活動レポート

ネットワーク通信

2016 No.68 秋号



ネットワーク通信は再生紙を使用しております。

発行 / 一般財団法人 経済広報センター
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-3-2 経団連会館19階
TEL:03-6741-0021 FAX:03-6741-0022

発行日 / 2016年9月28日

<http://www.kkc.or.jp/>